

2023年(令和5年)

1月16日

月曜日

夕刊

神戸新聞



おいしさをずっと、400年。

ヒガシマル醤油

<http://www.higashimaru.co.jp/>

播磨の名水&うすくちしょうゆ発祥の地:
兵庫県たつの市ヒガシマル醤油株式会社

毎年1月17日が近づくとも胸がドキドキする。あの日の記憶が鮮明に蘇るからだ。あの朝、神戸市灘区の古いマンションの5階にあったオモチャのように歪んだ部屋で飛び起こされた。慌てて外に出た時、なぜか傘を持っていた。マンションの壁から出た埃を雨だと勘違いしたのだ。

通勤路はすべて通行不能なので車を置いて職場の市立菅屋病院まで1時間歩いた。倒壊家屋を横目にしながら病院がどんな状態か心配だった。外来周辺は怪我人で溢れ、不謹慎な表現かもしれないがまさに修羅場だった。その時から数日間、まさに不眠不休で我を忘れて負傷者の処置にあたった。完全に孤島と化した被災地のど真ん中の病院に、外部の医療機関から救いの手が入ったのは地震発生からピッタリ24時間後だった。この24時間にあたった数々のドラマは一生忘れない。子供の遺体に接した瞬間、嗚咽で我に返ったことも。4月ごろには、ぼつぼつ仮設住宅が建ち始めた。家族に頼まれて外来通院していた患者さんを診に

あれから28年

随想

長尾 和宏

行った。当時はまだ在宅医療という言葉はなかった。仮設住宅には病室と違い暮らしの匂いがあった。家族の愛が見えた。薬よりも大切なものに気が付いた。5月末で病院を退職し尼崎で小さな医院を開業した。37歳だった。その後、現在まで27年間で1500人の在宅看取りを経験するとは夢にも思わなかった。気が付けば今年65歳、つまり老人の仲間入りをする。

その16年後に東日本大震災が起き、支援に向かった。花巻空港に降り立ち救援物資を積み込み、支援から取り残されている人たちを探し励まして回った。阪神大震災でお世話になったことのお返しのため、逆にお世話を焼きたりもした。地域の人の病気だけでなく生活も診られる医者になんとかなれたのは、あの震災が契機だった。



ながお・かずひろ 長尾クリニック名譽院長。東京医科大学卒業。大阪大学病院、市立菅屋病院勤務を経て尼崎市で開業。医療、介護について積極的に発言。著書に「ひとりも、死なせへん」など。